



Hyogo Vision 2050

言葉の先に、兵庫の未来が見えてきた。

# 助産師

淡路  
Awaji



# 鍛冶職人

摂津  
Settsu



播磨  
Harima

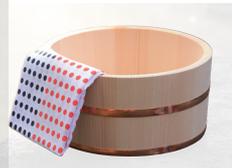


# デザイナー

2050年の兵庫の未来を描く『ひょうごビジョン2050』。  
今回は、兵庫の各地で暮らし、働き、続けてきた人たちの  
「言葉」と「実感」を通して、これからの兵庫の姿を見つめていきます。  
一人ひとりの声の先に、未来へのヒントがあります。

# 漫画家

但馬  
Tajima



# 料理人

丹波  
Tamba



ひょうご  
ビジョン  
2050  
<https://hyogo-vision.com/>

# HYOGO VISION 2050

# 続けてきた人たちの、言葉。

強さは、最初からあったわけじゃない。  
正解が分からない日も、辞めたくなった瞬間も、  
それでも続けてきた時間が、言葉になって残っている。

## 料理人

鹿にも一頭一頭の個性がある。  
それを活かし、命に感謝して美味しく食べる。  
古いものは修理して、大切に使う。  
循環するとはそういうこと。

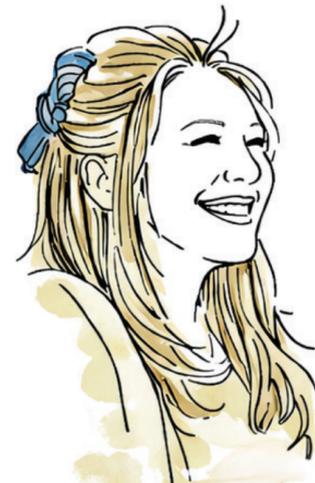


# 捨てられる命を、 美味しくする。

# 縁と縁が重なって、 辞められなくなった。

## 助産師

親が子を育てるのは、  
どちらの運命にも関わる貴重でやりがいのあること。  
困っている親子に子育ての楽しさを伝え、  
次の世代に繋いでいきたい。



# 正解がないから、 地域で見守る。

## 鍛冶職人

様々な縁に運ばれて包丁作りを続けている。  
技術を高めながら伝統を繋いできてくれた親方、  
またその師匠、さらにその先の先人のためにも  
伝統を繋げていく。



# はだかの上で、 平等。

## 漫画家

肩書きも立場も脱ぎ捨てて語り合える距離感。  
国内外のアーティストも、ママ友も、  
同じ湯に浸かり、同じ目線で言葉を交わす。



# いつからでも 挑戦できる。

## デザイナー

高い壁があっても、何歳であっても、挑戦は自分次第。  
出会いを大切にしながら好きなことを一生懸命にやれば、  
必ず道は開けていく。



助産師/  
一般社団法人 ファミリーケアセンター MOM  
代表理事

## 岡垣 裕美さん

愛知県出身、家族の転勤で24年前に淡路島へ。助産師・看護師・保育士資格を有し、病院・市役所勤務を経て産後ケア特化の助産院を開院。中学・高校で思春期教育の特別授業を担当。看護学校でも教える。



## 暮らしの継承「淡路」

**気づきが、動き出す力になる**  
中学生の頃、産まれてきた命に最初に触れられることに感動し、助産師を目指すようになった岡垣さん。最初に働いた大阪の総合病院では年間約900件のお産に立ち会い、毎日立ち会いほど感動していたといいます。しかし、それ以上に気になったのは、育児に不安を抱えるお母さんの姿。病院では話す時間も無く、地域に帰ってからの生活こそ助けたいと思うようになったそうです。

その後、淡路島に移住した岡垣さんは、洲本市役所で新生児訪問事業に携わります。願っていた産後ママのサポートはやりがいがある、15年ほど続けたところ、産後ケアの必要性を国が謳うようになり、島内でも受け皿の整備が急がれました。上司や仲間の薦めもあり、2023年に立ち上げたのが助産院MOMです。「市役所にいると、夜間や休日など本場に助けを求められているタイプ



**ひとりにならない  
それが支えるということ**  
開院後、印象的だったのは、泣きながら相談に来てくれたお母さん。結婚で来島し、知り合いもおらず、初めての育児で途方に暮れていたそうです。「離乳食作りで悩んでいたのを、市販のフードで大丈夫だよと伝えて。お母さんが3歳になった今でも連絡をくれます」。舌の動きや咀嚼能力など、身体の発達具合を細やかにチェックしながらお母さんとの対話を進めます。今は情報が手に入りやすく、「この月齢ならこれができるはず」と判断しがち。でも、性格や発達は一人ひとり違うもの。きょうだいでさえ違うので、その子自身を見てあげることが何より大切です。

対応するのは岡垣さんを中心とした専門家たち。多職種連携を掲げ、看護師・助産師・作業療法士といった専門家と契約し、必要に応じて市役所にもつなぐほか、医師や保健師、管理栄養士、社会福祉士とも連携します。「指導する立場だからこそ、科学的な最新の情報を常に触れられるよう勉強している」と話す岡垣さん。来院するお母さん方の会話にも学びが多いといいます。

# 正解のない「子育て」。 楽しみ方を教え、 地域で見守り、 幸せな親子を増やす。

活動の場は外にも。中学・高校で行う思春期教育の特別授業「いのちのおはなし」は、15年ほど続けてきたこと。できるだけ感情を込めず、事実だけを伝えていても、自然と親への感謝や自己肯定感が芽生えるようです。授業を受けた子が助産師になるという嬉しい奇跡も。褒め方や叱り方、成長に気付く力など、保護者に「子どもの見守り方を教える講座も始めました。目の前の子育てを楽しみ、思春期以降の親子の関係を良くすることも意識しています。重要なのは、親が変われば子どもも変わること。子どもを変えようとするのではなく、親が笑顔になるのが第一です」。子育て中のママ・パパから、将来親になる可能性秘めた子どもたちまで、人の一生に関わる助産師の仕事は、次の世代へと継承されていきます。

活動の場は外にも。中学・高校で行う思春期教育の特別授業「いのちのおはなし」は、15年ほど続けてきたこと。できるだけ感情を込めず、事実だけを伝えていても、自然と親への感謝や自己肯定感が芽生えるようです。授業を受けた子が助産師になるという嬉しい奇跡も。褒め方や叱り方、成長に気付く力など、保護者に「子どもの見守り方を教える講座も始めました。目の前の子育てを楽しみ、思春期以降の親子の関係を良くすることも意識しています。重要なのは、親が変われば子どもも変わること。子どもを変えようとするのではなく、親が笑顔になるのが第一です」。子育て中のママ・パパから、将来親になる可能性秘めた子どもたちまで、人の一生に関わる助産師の仕事は、次の世代へと継承されていきます。



## HYOGO VISION 2050

### 誰も取り残されない社会



- みんなが生きやすい地域
- 安心して子育てできる社会
- 安心して長生きできる社会

すべての人が平等に機会を得られ、安心して生活できる社会です。年齢、性別、障がいの有無に関わらず、誰もが支え合い、参加できる環境を整え、一人ひとりが尊重される未来をめざします。

この記事のWEB版、動画はこちら



1927年神戸市生まれ。27歳でオートクチュールの店をオープン。着物地や帯地を用いたドレス作りがライフワーク。70歳でパリ・オートクチュールコレクションに参加。2025年の大阪・関西万博では企業パビリオンのドレスを制作。

ファッションデザイナー  
藤本 ハルミさん



# 伝統を背負い、世界を駆ける。

原点はいつも「好き」だった



パリ・オートクチュールコレクション

2025年の大阪・関西万博の企業パビリオンで、VIPアテンド用に作られた20着のドレス。一つひとつ、形も素材も異なるオートクチュール（オーダーメイドの一点物）で、桜や松竹梅など日本伝統の模様と布地から作られています。デザインしたのは、2026年に99歳を迎える現役デザイナーの藤本さん。日本の伝統文化とオートクチュールを融合したドレス作りをライフワークとして、半世紀以上を歩んで来られました。

新進気鋭の精神を持つ船乗りのお父様と、おしゃれなお母様の間に生まれ、神戸で育った藤本さん。洋裁学校を卒業後、東京で美術を学んでいた時にお父様が倒れ、長女だった藤本さんは家計を支えるため、故郷の神戸でオートクチュールのお店を開きました。戦後で着る物のない頃、お店はよく繁盛したそうです。

30代後半で初めて出かけたヨーロッパ旅行で、藤本さんはカルチャーショックを受けます。「気候風土、人々の体型、何もかもが日本とは違っていました。私が作ってきた洋服はヨーロッパの民族衣装だったかと思いつかれたのです。かといって、今さら着物に戻ることはできません。日本人の新たな装いを、私自身の手で見つけ出さなければならぬ」と思っていました。そこから、日本の伝統に立ち返った藤本さん。必死で勉強し、西陣織や友禅染といった素材を用いたドレス作りを始めました。上質な厚手のシルクや高温多湿の夏に最適な布地、日本人の体型を美しく見せる形、そして、流れゆく日本の四季を表す模様にとだわってききました。

1938年の大水害、1945年の大空襲、そして1995年の阪神・淡路大震災。藤本さんは長い人生の中で、歴史の水害当時は1歳だった藤本さん、近くの川が水かさが増して行く中、学校で母様の迎えを心細く待っていたことを覚えていたそうです。空襲では、雨のように降り注ぐ焼夷弾が、神戸の街を焼き尽くす光景を自宅から泣きながら見ました。私の弟も15歳で志願し、両親は喜んで一人息子を送り出しました。だからこそ、戦争にはこれからも反対し続ける」という言葉が重く響きます。震災では両親との思い出が残る自宅が全壊し、助け出された藤本さんは背中を骨折する重傷を負いました。天井が目の前2センチのところに落ちている真っ暗な中、勇気を出して脱出しました。命が助かり、療養でき、仕事場が残った幸運に感謝。若い人たちの頼もしさ、全国から駆けつけた人々へのありがたさを感じ、神戸を愛する人たちの前向きな様子にも感銘を受けました。

九死に一生を得る経験を経て、オートクチュールの聖地、パリでショーを開いたのが70歳の時です。「日本の着物は美しく、世界の文化遺産。でも外国人が着ようとは思わない。あなたのドレスなら、世界に日本の素晴らしさを伝えられる。パリ・ファッション学院院长マダム・ソラーからの高い評価と応援を受け、「コレクションへの参加を決めたものの、高い壁もありました。当時、一枚も売れなく、いいと思って作りつけたドレスは30着。ショーにはあと20着足りません。フランスのオートクチュールのドレスは特別な布地や高い縫製技術、宝石などの装飾に彩られ、着数十万円から数千万円のお金がかかっています。あと20着を自身の力で作りました。結果は大成。ショー開催の翌朝には現地の有名紙に取り上げられ、その後、モナコやニューヨークにも招待されました。

友人から「みんなが介護施設を探している時に、あなたは青春をしている」と応援してもらったという藤本さん。趣味も多く、大好きな歌舞伎では「扇屋の役者さん」を3代にわたって見守ってききます。人生で大切なことは、「好きなきことをする。一生懸命勉強する、出会いを大切に」。若い人たちにも自分を大切に、好きなことをやってほしいと話しています。壁の高さや年齢に関係なく、人はいつでも挑戦できることを自身の生き方で教えてくれていきます。

# 学んだことに向こうに膨大な歴史がある

# 自分の技が伝統の最先端。

包丁鍛冶職人  
田中 誠貴さん

明治末期から続く田中一之刃物製作所の4代目当主、オリジナルブランド「誠貴作（しげきさく）」を中心に、手作りにこだわる包丁は国内外で多くのユーザーを獲得しています。

不意に感じた  
光る背中を追う覚悟

全国伝統的工芸品「播州三木打刃物」で知られる三木市。日本最古の鍛冶のまちとされる場所、唯一、「本鍛冶」（二丁こと手で叩き、鍛え上げて作る製法）の包丁作りをしているのが田中一之刃物製作所です。かつては鎌鍛冶として草刈り鎌の製造をしていましたが、安価な鎌が海外から入ってくるようになると、時代のニーズに合わせて包丁の製作を並行するように。4代目となる現当主の田中誠貴さんは高校卒業後、刃物の名産地・福井県武生の伝統工芸士鍛冶職人の元で包丁作りの修業をスタートしました。「当時は家業を継ぐ気などまったくありません。散髪屋を継ぐために敵し、修業



## 地域の伝承【播磨】



をしていた先輩に説得されたりして、福井へ行くことを決めました。「人ほっこりです、言葉はわからないし、いつも辞めてやると思っていましたね（笑）」。「敵しい修業の日々の中、迷いながらも修業を続けていた誠貴さんは、自身の考えが変わる光景に出会います。「ある日、工場の窓から落ちる光の下で仕事をしておっちゃん、背中が、めっちゃかっこよく見えた瞬間があったんです。後光が差したように、これはかっこいいなと。先輩の生き様、職を極めるということに憧れを感じ、やりがいを見つけた誠貴さんは職人の道へと邁進しました。

三木市に戻ってしばらくは、鎌の製造をしている工場の傍らでひとり包丁を打っていたという誠貴さん。4代目として製作所を継いでから、包丁作りに完全シフトすることを決めました。「当初はいかに親方に近づいたか、ただただ真面目に包丁を作っていたと思います。三木市の金物商社の声かけから海外で包丁を販売することになったのですが、そこで高い評価を得ることができました。時期や運が良かったこともあり、人の縁ですよね。一生懸命やっていれば勝手にそういうものが付いてくるんやなと

思いました。本鍛冶による本物の切れ味とデザイン性を追求した「誠貴作」シリーズは、今や世界最高ランクとも評されるブランドに。また、日本の包丁が良いというわけではなく、「誰かが作った包丁だから良い」と評価してもらえない世界にふれた誠貴さんは、職人としての自信を得たそうです。

千数百年の技を、未来へ繋ぐ

田中一之刃物製作所では次世代の包丁職人も育っています。「僕が辞めたら誠貴作はなくなりません。それはそれで構わないです。ただ、僕は親方に技を教えるもいきました。その親方も父親なり師匠に教えてもらって、そういつたことを聞いた歴史の上で今、僕がやっているわけですから。だから先輩たちのためにも自分で止めるわけにはいけません。僕がしてきたことも次の世代に伝えなければいけないと思っています。Aいやテクノロジーで得られる知識や理屈と異なり、経験と実践の上でしか得られない技は、軽やかといえなくなってしまうと誠貴さんは話します。

刃物の産地である三木市を包丁から盛り上げていきたいという思いもあり、他業種とのコラボレーションで、ロリータファッションやロボットアニメの武器モチーフにした刃物の製作にも携わり



## HYOGO VISION 2050

### 新しいことに挑戦できる社会

- みんなが学び続ける社会
- わきあがる挑戦 ●わきたつ文化

いろいろな経験ができ、一人ひとり異なる人生の道筋を描ける。教育の形が変わり、生涯を通じて学び続け、新しいことに挑戦し続ける人が増える。兵庫の多彩な文化が地域の魅力を高めるような社会へ。

この記事のWEB版、動画はこちら



この記事のWEB版、動画はこちら



## HYOGO VISION 2050

- 循環する地域経済
- 進化する御食国
- 活動を支える確かな基盤

デジタル経済、シェアリングエコノミーが進む中、持続可能な経済社会をつくる取り組み。地域に根付く、食・農・エネルギー・文化など生活に密着した産業が成長し、地域の中で価値が循環する自立した社会をめざします。



自立した  
経済が  
息づく社会



文化的価値を県内外に発信し、自然と組み合わせたアートや滞在型の取り組みで、雇用を生み出してほしい。30代

県として何が強みなのか、外からは分かりにくい。40代

伝統的な建築物、人にやさしい地域性、そして、おしゃれな感覚。40代

挑戦したい人ほど、外に出ていってしまう印象。30代

山・海・町を、同時に感じられる瞬間があります。神奈川県出身の私には、とても魅力的な風景です。30代

港のにおいと、海沿いの雰囲気、兵庫を感じる。40代

名産も名物も、何でもあるところ。30代

異なる文化を持った五つの地域が集まっていて、さまざまな感性を持つ人に出会えるところ。30代

南部・中部・北部と、それぞれに異なる文化や風俗、自然に触れたとき。40代

帰りたくなる場所。20代

車の運転マナーが、全体的に悪いと感じます。変わってほしいです。40代

どの駅を降りても同じ空気になるのではなく、それぞれの違いが残っていてほしいと思います。30代

大阪ほど混雑しておらず、梅田から帰ってくると、ほっとする。そんな距離感に兵庫らしさを感じます。20代

都会すぎず、田舎すぎない暮らし。20代

人口が減っていく中でも、東京から移住したくなる県であってほしいです。40代

都市の民と村の民が行き来しあい交流することで、あえてローカルで完結できる地域になればよいかと思います。60代

失敗を怖がらずに挑戦できる空気。50代

レトロと新しさが、無理なく混ざっている街並み。40代

阪神・淡路大震災を経験した人が多く、助け合いの精神や、不屈の気持ちを持った人が多いと感じる。50代

県の「広さ」が生み出す景色の多様性。60代

それぞれの場所が、それぞれの盛り上がり方をしている。そんな兵庫が素敵だと思います。30代

あなたの声も聞かせてください



ひょうごの日常から、聞こえてきた言葉。



## ひょうごビジョンって何？

ひょうごビジョン2050は、“これからの兵庫の暮らしをどう良くしていくか”を県民みんなで考えるための未来の設計図です。

その全体像や考え方を、WEBで紹介しています。

[詳しくはWEBへ](#)

# HYOGO VISION 2050



兵庫県 企画部 計画課  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号  
TEL 078-341-7711(代表)



ひょうごビジョン 2050 <https://hyogo-vision.com/>

ひょうごビジョン2050

検索